

神前樹利教授追悼号によせて

神前樹利先生は1999年7月23日急性骨髄性白血病のため1年あまりの闘病生活の末に逝去されました。享年48歳でした。1989年4月に立教大学経済学部講師として赴任されて以来、10年間にわたって学部のために力を尽してこられました。この間1992年4月に経済学部助教授、1999年4月に同教授になられました。

先生は学部の授業では「農業経済論」や「経済学」等を担当され、多くの学生の教育に当たられ、懇切な指導と温和な人柄で学生から信頼を集め、学部のゼミナールにおいては、優秀な卒業生を社会に送りだされました。また大学院においても熱心に研究指導に携わってこられました。

先生は1997年から入院されることになった1998年の夏まで経済学科長の重責を務められ、また大学の全学委員として人権問題委員、国庫助成連絡委員、全学共通カリキュラム運営委員等を務められるなど、大学の役職を通じて本学の教育・研究の充実に力を注がれました。

先生は研究者としての歩みを「小農問題」を研究対象とすることからはじめられました。「第二次大戦前の東ヨーロッパにおける小農民的経営—Doreen Warriner, Economics of Peasant Farming の紹介」(1977年10月)、「ペザント経済の一考察」(1978年12月)において、小農問題の位置付けについての考察が行われています。そこでは「ペザント経済」の限界と矛盾が明らかにされ、資本主義経済のもとでのその存続根拠が考察されています。同時にこれらの考察は、日本の現代の農業問題を分析する際の視角に関わる重要な示唆を与えています。この「ペザント経済」研究によって培われた視座は立教大学に赴任後の先生の研究生活を貫くものであったように思われます。

立教大学に赴任された後は研究対象領域を拡げ食糧需給の問題に焦点が当てられるようになり、「食品産業の構造」(1991年)「日本の農業と食糧」(1992年)「食糧輸入大国をめぐる若干の問題」(1996年)「食糧需給構造の変貌と農政の展開」(1997年)等々の論文が公表されました。それらの諸論文は日本農業の(あるいは日本の食糧政策の)危機的な実態——食糧輸入依存への傾斜が農業の衰退と食品産業の空洞化をもたらすという実態——を浮き彫りにしており、同時に政策のあるべき方向性を示唆しているように思われます。

本追悼号では関西大学名誉教授の東井正美先生に「故神前樹利先生の人と学問」をご執筆いただくことができました。多くの方に神前先生の人柄や研究の歩みを振り返っていただくことを願っております。

神前先生は優れた業績を挙げられましたが、ご自身の研究計画の構想からみれば、恐らく歩み半ばであったであろうと察するところであり、痛恨の思いが致します。

先生は多くを語ることは好まず、どちらかというと寡黙な人でしたが、重要な局面における一言は妙に人を納得させる力を持っていました。それは恐らくは、物事を見極める透徹した「眼」と表裏のない誠実で純粋な「心」をもった人柄によるものであったからであろうと思われます。経済学部は現在、幾多の難問や課題をかかえています。このような状況の中で先生の存在が、いかに学部にとって大きなものであったかを今更ながら痛感せざるをえません。

経済学部は、1999年9月25日にチャペルにおける学部葬で先生をお送りしましたが、加えてここに先生のご功績を永くとどめ、心からの感謝の念を表すために本誌を先生の追悼号といたします。

どうか安らかに眠りください。

2000年5月

経済学部長 北川和彦